

くらしナビ 生活スタイル

# 一人一人に合わせた投薬を

徘徊、怒り、暴力、一日中ぼーっとしている――と、さまざまな症状が出る認知症。2025年には65歳以上の3人に1人が認知症や予備軍になると言われる。本人はもちろん、介護する人の心身への負担も大きく、誰にとっても人ごとではない。みんなが笑顔で介護できるようにするには、どうすればよいだろうか。投薬、治療、患者との接し方について考える。



## ●突然、怒りっぽく

埼玉県在住の和子さん(69) 仮名IIは、細かい字で書きしり書かれたメモ帳を手に話し始めた。  
「2月21日、テレビのリモコンを隠す▽28日、下着を出すのが遅いと言ってボールを投げつける▽3月6日、入浴



食後に服用する薬を受け取る認知症の男性(中央) 群馬県高崎市で、鳥井真平撮影

の際、怒り出し水をかけようとする▽4月4日、陰部をかく▽8日、風呂上がり胸をさわらせると怒鳴る」  
メモ帳には、夫(76)の日々の言動が書かれていた。  
2年前、心臓の治療のため1カ月半入院したのをきっかけに、薬の飲み忘れ、尿失禁、自分の部屋がわからないといった症状が表れた。自宅に戻り、さらに症状が重くなった。病院に診察に行くと、検査もせずに「認知症の薬を出しましょう」とアルツハイマーに効果がある「ドネペジル」を処方された。最初は特に問題はなかったが、今年1月から怒りっぽくなったという。

「温厚な人だったのに、突然、『この野郎!』と怒鳴り、手をあげようとした。目が据わり、顔つきが変わって別人のようで……。本当に怖かった」と和子さんは振り返る。ケアマネジャーに相談したところ、専門医を紹介された。「性的な欲求、怒りは薬の副作用かもしれない」と言われ、服薬を中止したところ、少しずつ落ち着きを取り戻した。5日後には以前のように穏やかな状態になったという。和子さんは「最初の医師からはなんの説明もなかった。認知機能は回復しませんが、怒ることがなくなり、穏やかに過ごしています。本当にありがたい」と話す。

## ●少量だと保険外に

埼玉県川越市の「池袋病院」副院長で、脳外科医の平川巨さんは「認知症の薬は一人一人効果が異なり、副作用が出る人も少なくありません」と話す。規定量の投薬で、怒り、イライラ、暴力、徘徊といった症状が出て、相談に来る家族は多いという。

昨年9月には医者や弁護士らが一般社団法人「抗認知症薬の適量処方を実現する会」(長尾和宏代表理事)を設立した。全国の医師や患者の家族に呼びかけ、副作用の実態を調査。計178件の症例を



飲み終えた薬の包装を取っておくと、服用したかどうかがチェックに役立つ

ウェブサイトで公開している。厚生労働省は今年6月、「規定の用量未満での投与でも理由を明記すること」で保険適用を認めるようにと通達を出した。

## ●患者の3割、要改善

認知症の医療に詳しい山口晴保・群馬大教授は「これまで診察した患者で、規定通りの処方ではない人は7割だった。1割の人に副作用で困った症状が出て、2割は投薬の仕方をもっと工夫する必要があった。患者さんの症状、経過をきちんとみた上で薬や投与量を考えるのは医師として当然のこと」と話す。

85歳以上の高齢者や重度の症例には抗認知症薬は明確な効果が見られず、副作用が出やすいという報告もあることから、山口教授は「効果があれば継続、なければ中止する」のが投薬のスタンス。患者さんも薬を飲み始めて調子が悪くなったなら、まず中断して医師と相談した方がいい」と話す。【小川節子】

## 朝ご飯の大切さ伝えるプロジェクト

朝ご飯を食べて排せつする健康な生活習慣を身につけてもらおうと、NPO法人日本トイレ研究所とスナック菓子大手「カルビー」が、小学校で朝ご飯の大切さを伝える朝ハロしよープロジェクトを始めた。7月中旬に東京都足立区立平野小学校で行われた初めての授業では、5、6年生が正しい生活習慣と栄養素の役割などを学び、カルビーのシリアル「フルグラ」にチョコレートやゴマなどのトッピングをかけて朝食作りを楽しんだ。同研究所の調査によると、小学生の5人に1人が便秘状態で、その保護者のうち32%が子の便秘に気づいていないという。加藤篤代表は「自然と排便につながる朝食の大切さに焦点を当てた取り組みで、子どもを通じて保護者の意識改革も促したい」と語る。プロジェクトは今後、全国の小学校で展開していく予定。【稲田佳代】